

## 第11回全国水の郷サミット パネルディスカッション

ーコスト縮減下における水の郷の地域づくりの展望ー

コーディネーター：堀 繁 東京大学教授

パネリスト：伊藤喜平 下條村長

馬場弘融 日野市長

高野雅夫 名古屋大学助教授

仁井正夫 国土交通省水資源部長

堀教授：

それでは、5時50分までお時間を頂戴しまして、パネルディスカッションを進めたいと思います。テーマは「コスト縮減下における水の郷の地域づくりの展望」です。先ほど講演などを頂いた方もおられますが、自己紹介を兼ねて、先ほどお話されたことのまとめや補足をお話していただき、その後、活発に議論を広げたいと思います。それでは、高野さん・伊藤さん・馬場さん・仁井さんという順番でお願いします。

高野助教授：

名古屋大学の高野と申します。私はもともと人間社会のこととは縁遠い理学の地球科学をやっていたのですが、地球の歴史を調べていくうちに、人間の今の時代というのとはとても変な時代であることや、そしてこれからの地球の未来がわれわれの選択によってだいぶ違ってしまおうということを知りました。そこで、地球の未来の歴史を研究しようと思い、4年前に創設された環境学研究科に理学研究科から移りました。

今日のお話は、どれも感銘を受けるお話でありまして、堀先生のお話、資源があっても活かさなきゃだめだよ、活かすポイントに2つに尽きるんだよ、というのがとてもわかりやすく、感銘を受けました。生態系の回復に関する日野市の取り組みについてですが、生態系が壊れていく事例は山ほどありますが、回復に向けた組みの事例はなかなかありません。昔の湧き水や用水路を維持・活用して生態系を戻すことに市をあげて取り組んでいることは本当に貴重なものだと思います。魚の種類が倍になったとか、トンボがちゃんと居つくようになったとか、本当の生態系になってきていることが目で見てわかることに感銘を受けました。

それから伊藤村長のお話についてですが、私も、学問上、できることは自分たちでやる、できないことがあったら役所が支援する、それも基礎自治体である市町村が最初で、市町村が対応できない場合に都道府県が対応するという住民自治の補完性の原則については承知しております。伊藤村長は、このような教科書的な勉強ではなく、現実の中からさまざまな取り組みをなさっていると思うのですが、断片的な取り組みはいざしらず、村を挙げて取り組んでいる事例は本当に少ない。非常に先進的な事例であると思います。

全体としては、今、歴史の歯車が大きく変わろうとしている、ある意味では逆転しよう

としていますが、歯車が逆転したすと、今までは一番取り残されていたもの、遅れていると思っていたものが逆に最先端になる。それがまさに下條村であり、日野市であるという風に思いました。以上です。

堀教授：

伊藤村長、お願いします。

伊藤村長：

私、先ほど申しましたように、今日まで貧乏村の村長を13年余やっております。就任以来、その私が危機感をいただいていたことは財政問題です。この期に至って、国はもちろん、県、そして末端の行政も、もう騒然たるものでございます。国と地方の借金はまもなく800兆円になるということでございます。皆さん、800兆円という金は、大変な金でございます。700兆円より100兆円多いという程度の認識では困るわけでございます、1兆円を1億2500万人で割りますと、1人当たり8,000円でございます。800倍して640万円、赤ちゃん・じいちゃん・ばあちゃん一人一人がそれだけ借金していることでございます。5人家族であれば3,200万円です。この借金は、いつ、どうやって返せるかということですが、このままの状態では2010年代の前半までは借金が増え続けると政府が発表しています。つまり、何とか借金が増えないようにした後、ようやく借金を消していくこととなります。誰がどうやって払うかということを実際に考えて頂かないと大変だと思います。

私達は皆、日々一生懸命頑張っていますが、見方を変えれば、次の世代に向けて一生懸命借金を作っているだけとも言えるかと思えます。こんなことはいつまでも続くはずはありません。私は常々職員諸君に言っています。高いアンテナを張り巡らせて大局を見てくれ、こうした現実を目をそむけることなく、先送りすることなく、一歩を踏み出し、住民に心から信頼されるリーダーとして行動することが、全体の奉仕者である公務員のあり方であると。

堀教授：

ありがとうございました。では、馬場市長お願いいたします。

馬場市長：

日野市の馬場でございます。今日は村長さんはじめ、先生方のお話がとても勉強になりました。ありがとうございました。私ども日野市の例は先ほど担当職員から説明があったとおりです。都会ではありますけれども、一生懸命努力をして、持っている環境、特に水資源を生かして、町づくり、町の活性化に努めよう、こんなふうに努力をしているところです。

先ほど高野先生からお話がありましたが、今、我々は、昭和の世代としてがんばって、良い家にも住め、良いものも食べられ、良い衣装も着られるなど、とてもいい生活ができたと思えます。その一方で、まもなく18・19歳になろうとしている次の平成世代に、われわれが受け継いだものを受け渡すことができるかを考えると、かなり反省をしなければい

けない。そう考えると、大量生産・大量消費のあり方から一人一人が抜け出して、生活そのものから変えていかなければいけないかなと感じています。

私ども日野市は近隣と比べて町づくりが遅れているというようなことを随分言われていたのですが、おかげで良い環境が残ったというメリットがあります。近代文明への悪さへの反省を踏まえてですね、これからは、歩く魅力とか不便さを中心にして、今ある水とか緑の環境を活かす町づくりができないだろうかと思っていますところ。これに、堀先生からお話があったような人を惹きつける仕掛け、行ってみたくなるような仕掛けを加えれば、資源がより活かせるのかなと思います。

こういう思いに至りましたのは、数年前にゴミの大改革をしてゴミの有料化に取り組んだ際に、「がんばってやれよ」と市民の皆さんにから応援して頂いたことや、「我々の生活は行き過ぎているのではないか」という感覚が多くの方にあることを知ったためであります。

そういった意味では、適正生活といえますか、適正消費ということ踏まえてこの問題に取り組んでいくと効果が出てくるのではないかと考えているところ。基本的には、やや不便かもしれないけれども、ちょっと昔の生活を思い返して町づくりに生かしていく、そんな発想を持ったらどうかということを感じました。

堀教授：

それでは仁井さん。仁井さんは先ほどの講演・事例紹介をやっていないので長めで結構ですので、お話をいただければと思います。

仁井部長：

水資源部長の仁井でございます。昨年(2004年)の7月から今の職に就いております。前任者・前々任者と違っておりますのは、省庁間の交流人事によって現職に異動となったことで、役所用語で言いますと、私の本籍地は環境省でございます。逆に、今の職の前任者が環境省に異動しております。

水に関連しましては、私が役人になってから30年ほどの中で、水道や水環境等の行政にそれなりの時間携わっております。また、廃棄物やリサイクル関係といったことにも携わっております。ですから、バイオマスや合併処理浄化槽についての今日の話につきましては、かつて私が携わっていたことでもあり、今日のお話は非常に刺激的であったと思っております。

4氏の講演・報告を聞いて、いくつかのキーワードが頂けたという気がしております。

まず、「自律」ということ。言葉をやや変えれば、自分の身の丈を考えながら、それなりにマネージしていくということ。それから「持続性」というものをどうやって考えていくのか。やはり、これから人口が増えない地域としては、人や暮らし・経済の持続性を持たないといけない。また、今ある資源をいかに活用していくかについては、実際に適用していくことは簡単ではないような気がしますが、非常にシンプルな二つの原則を堀先生からお示しいただきました。

今、日野市長から「ちょっと昔の生活を思い返して」といったお話がありましたけれど

も、私も環境省で温暖化の関連でライフスタイルについて考えたことがあります。やはり、ライフスタイルを変えていくというようなことについては、上からの押し付けみたいなものではなくて、新たなライフスタイルに価値観や格好良さみたいなものをどうやって見出していくか、こういうところで新しい視点を作っていくと、社会や地域の持続性が意味を持つようになるのかなと思っておいます。

以上、取りとめのない話ではありますが、非常に刺激を受けた1時からの時間でございました。

堀教授：

どうもありがとうございました。

それでは、これからいくつか論点を立てて議論をしていきたいと思ひます。今日のサミットの重要なテーマは、「無駄なお金をかけずに」「地域の資源をうまく使って」「活性化しよう」、それもある時だけではなくて、「持続的に活性化しよう」という3点です。お金をかけずに、地域の資源をうまく使って、持続的に活性化しようということです。

伊藤村長の最初の基調講演は、皆さん、大変刺激だったと思ひます。私も聞きたいことがたくさんありまして、まずは、無駄な金をかけずにというか、コストとか財政の話について聞いてみたいと思ひます。伊藤村長のお話は多岐にわたっていましたが、お金を極力減らす工夫、特に私が驚いたのは村民が自分たちで道路を作ってしまうことです。馬場市長、下條村さんのお話を聞かれている際に「なるほど」と何度もうなずいておられました。下條村で伊藤村長がやられた工夫は普遍的なものなのでしょうか？。あるいは、あれは伊藤さんの個性であって、なかなか難しいことなのでしょうか？。このあたりをお聞かせいただければと思ひますが。

馬場市長：

実は伊藤村長のお話を伺って、ほとんどこれは応用できるという感じで私は聞いておりました。特に職員の意識改革とか、行政と市民の役割分担、あるいは教育の大切さなどは、我が日野市でも対応できると思ひます。うちの職員も何名かこの会場に来ておまして、すぐ何人かを3ヶ月ぐらい下條村に派遣して、鍛えてもらおうかと思ひたくらいであります(笑)。

堀教授：

それはたいへんですね。(笑)

馬場市長：

基本的には村であっても都会の市であってもですね、ほとんどこの意識でやらなければいけないと私は思ひました。また、周りの県や都がああだこうだと言っても、リーダーである首長はこれと思ひたことを言い続けることがすごく大事だなということも強く感じました。

先ほども申し上げましたが、私どもは数年前にゴミの改革を実施し、市民の皆さんに結

構高い負担を強いました。その際、私どもは、東京都下で日野のゴミの始末が一番悪いという現状を一生懸命説明して、何とかやろうと言いつけたんですね。その結果、皆さんに努力してやって頂いている。今後、住民の皆さんに負担をお願いするという行政のあり方が定着してくるんじゃないかと思っております。

高度経済成長の時代は、住民の皆さんからお願いされたことをすぐやる、今日できなければ明日やるというのが良い首長であったと言われております。けれども、昨今はそうじゃなくて、行政だってこんな大変なんだということをさらけ出して、最後の支えだけは行政がしっかりやるけれども、一緒にやれるものはやってください、費用負担とか労力の負担等についてはできるものは頼みますと首長は言っていくべき時期に来ていると思います。

基本的には、くどいようですけども、伊藤村長さんと同じような認識を更に私は言い続けなければいけないと思っております。それが良い町づくりにつながると思います。

堀教授：

伊藤村長の先ほどの話の中で、4,000人でやりやすかったという話がありました。日野市はものすごく大きいわけですけども、その辺、不都合は感じませんか？。

馬場市長：

行政の適正規模は確かにあると思います。ですから、あまりにも極端に大きな自治体へと合併していくのが果たして良いのかどうか私も思います。伊藤村長の下條村は37平方キロメートルでしたか？。私ども日野市の面積は27平方キロメートル。ちょうど三角形をしまして、その真ん中の高台にある役所の屋上から市全体が概ね見渡せるんですよ。ですから、人口は17万人おりますが、これくらいの規模であれば、村長さんが言われたようなことを私ども日野市でも対応できるのではないかと、職員の削減についてもかなりやれるのではないかと、私は自信を持ちました。市内に山奥があつたりすると、どうかなということも思いますけれども。

堀教授：

ということは、これは事務局にお願いかな。今日の伊藤村長の話は他の市町村でも十分応用可能ということだから、このサミットの結果を何らかの形にまとめて、少なくとも今日来ていただいた35市町村に配布するというをやると、サミットが形骸化しているなどと言われることがなくなっていくのではないかと思います。

では、関連して、仁井さんお願いします。

仁井部長：

今の話に関連しまして、私が水道行政に携わっていた時に簡易水道の黎明期の話を知ることがあります。その頃は、まだホームポンプがなくて、家で水を確保するのは女性・子供の仕事であることが多かった。このため、農村を明るくするといった観点から、簡易水道という手法がそれぞれの集落で非常にはやりました。この時の簡易水道は、役場がパイプなどの資材を供給して、お父ちゃんたちがそのパイプを埋めるという形で整備がなさ

れました。お母ちゃんたちは、水くみの仕事が明日から楽になるんだから、ちゃんと働きに行ってよ、とお父ちゃんに言った。こういうプロセスみたいなものは、きちんと伝えたいエピソードかと思います。

堀教授：

地方の現場を訪れた際、役場の方々に「こういうことをやったらどうか」と話しても、「今、財政が非常に逼迫していて、できない」としばしば言い返されます。実際、お金がないのですが、時としてお金がないことを言い訳に使っているようにも感じられます。伊藤村長、これに対して何かコメントを頂けると皆の刺激になると思うんですが。

伊藤村長：

私は、これからの自治体のキーポイントというのは意識改革であろうと思います。とはいえ、私どもは意識改革したくて意識改革したんじゃなくて、貧乏だったから本気で取り組めたのだと思います。金がある市町村ではなかなか取り組めないと思います。

巷の中小企業・零細企業は、大変な努力をされております。皆さん方も、何ののかの言っても一生懸命がんばっておるんですけれども、一生懸命と言っても行政組織の中での一生懸命です。一般社会の不況変革の嵐吹きすさぶ中を頑張るとる中小企業・零細企業の皆さんと比較する機会はなかなかないということでございます。だから、私たちが最高に頑張っておるといっても、神様がもし仮に居って、公平公正な目を見た時に、「本当かな」と言われるのではないかと思います。なぜならば行政には身近な比較対象が少ない、つまり良い意味でのライバルが不足している。ややもすると独占企業体質になりやすく、競争のない所に進歩はないと感じる時が多くあります。

例えば行政の経費というものは積み上げ方式でございます。ある課が本当なら「6.2人」あれば充分の時に「7人」にしとけとか、「3.3人」なら「4.0人」にしろとか、それを積み上げて年間の行政経費がこれだけかかりますというように、いくらでも積み上げることが可能です。身近にライバルが居らんですから。議会だってそんなに詳しくわかる人は少ないと思います、一度実績をつくれれば前例踏襲、来年もこの経費獲得のためにがんばるということになってしまいます。正にイギリスの行政学者パーキンソンが言っています。“行政組織は仕事の量に関係なく肥大し続ける”と。

民間は違います。例えば、同業のA社とB社があった場合に、一方の会社の経費率が80%であげるとしたら、他方の会社がこれに勝ち残るには、70%にしなければという答えを最初に出します。それから70%の経費で済ますにはどうするかというように、答えから下に割り出します。積み上げて答えを出すのと、答えから下へ落とすのとでは全然違います。これは中小企業の苦しい経験を積んだ者でなければ解らないと思います。

そこで当村では、「まず隗より始めよ」ということで、職員諸君が民間なみに意識改革した上で、常に極限まで努力を重ねた、これ以上はできないよということであれば、あとは地域住民にお願いするしかないわけでございます。このような姿勢であれば4,200人の地域住民は必ず理解してくれると思います。

私どもの村は、おかげ様で行政も住民も意識改革が定着したかなとの手ごたえを感じて

います。えらそうに言うわけではありませんが、地方交付税がピーク時の約40%減らされても対応可能なゆるぎないスリム化ができておると思っております。

堀教授：

これは、一番最後に話そうかと思っていたのですが、本日、このサミットに聞きに来ている首長さんが少ないと思います。来場されている方の多くは職員の方でしょう。皆さんが「今日は良い話を聞いた、得だった」と思っても、しかし、「これを市長に言ってもわかってもらえないだろうな」とも思われるのではないかと、思うのですよ。トップが理解していないと、下は動けません。やはり、「サミット」と名乗っているのだから、首長さんに対する働きかけをもう少しやって、政治家である首長さんと、実際に汗水たらす職員の方の両方に来て頂いて、今回の講演等を聞いてもらおうと、ずいぶん効果があるのではないかと思います。これは注文です。

さて、「無駄な金をかけずに」というテーマの答えは、非常に簡単にまとめると、「金をかけずに工夫しろ」というように叱咤激励されたように思います。

また、2番目の「地域の資源をうまく使って」ということに関しては、先ほど高野先生から、自然科学的に非常に論理的な展開で「こういう風に考えていけ」というような話があったのですが、あれを聞いて、なかなか難しいなと思われた方、これは素人にはできないと思われた方がいらっしゃるかと思います。そこで、「そんなことはないよ」というようなコメントを高野先生から頂ければと思います。

高野助教授：

一番わかりやすいのはエネルギーにかかっているお金の話だと思います。地域の人々はエネルギーのためにお金を払っていますが、よく考えれば、そのエネルギーは地域にあるのではないかとということです。豊根村の例で言いますと、山の中の村なので昔は電力会社が電気を引いてくれなかった。そこで、豊根村の人がどうしたかという、お金を出し合っ、川に水車を置いて、水力発電をして、電線を引いて、それで初めて電気が灯ったという集落があります。戦後、それらの発電設備が電力会社に買い取られたため、地域の人たちが地域内で使っていたお金が、地域の中に落ちずにですね、全部外に出ていくようになってしまいました。これをどうやって止めるか、という問題だと思います。こういう風に考えると、ちょっとわかりやすくなると思います。

貯金の話も同様です。何かビジネスをやろうとしたら必ず資金が要るんですけども、なかなか田舎では資金を出してくれる人がいない。しかし、皆さんは貯金をしています。その貯金は投資に回るべきものなのですが、それは村外に投資されてしまっている。やはり、地元でビジネスを起こしたい、地域の資源を生かしてビジネスを起こしたい、という人に地元のお金の貯金から資金が回るような、そういう仕組みが作れると良いと思います。

堀教授：

ありがとうございました。

地域の資源を有効に使うのはもちろんですが、資源を増やしていくということについて、

日野市さんがあのように徹底して水辺の整備をやっていることを十分には認識していなかったの、私は驚かされたのですが、合意形成はどうなっているのでしょうか。一箇所だけやるのあれば、さほど難しくないとは思いますが、あれだけ徹底的にやることに對し、市民の人たちはどう思っているのでしょうか。地域の資源を生かしたり、あるいは作ったりというのは、大々的にやると、必ずいろんな意見が出てくると思うんですね。その辺、日野市は皆さん大いにどンドンやれという風なんですか？。

馬場市長：

私どもの日野市は、水と緑のまちというのが基本にあります。

日野に住んでいる人やこれから住む人にアンケートをとりますと、「東京とはいえ、環境が結構良い」「環境が良いから住んだ」「環境が良いから住みたい」という人がいつも非常に多いことがわかります。つまり、良い意味で環境にうるさい多数の市民の方々が、過去ずっと日野の環境行政をリードしてきて、その結果、現在の市役所に環境共生部とか緑と清流課があるわけです。多くの方が、水とか緑、あるいは農業、里山、こういうものはしっかり守りましょうよという声が圧倒的に強い基本となっているのが私どもの特徴かと思えます。

このため、区画整理や道路整備でも、水路を埋めちゃえとか、直線の道路で良いじゃないかとかいう風潮も以前はあったのですが、途中で見直しをして、うねる川筋やうねる道路、親しめる水辺空間が区画整理事業の中でだんだん作られるようになってきたということです。あるいは、下水道がなかった時に本当に汚かった水路が、下水道の整備できれいになってきたので、もう一回水路を開けようという声も出てきました。

こういうことですから、合意形成をしなければ水辺の再生などができなかったということではなくて、むしろ市民の声に押されてこういう行政が今継続して成り立っていると思えます。近隣に八王子や立川のようなにぎやかな町があるんですけども、そうではない町の顔を作っていこう、新選組などの歴史的な遺産も加えていけば隣の町に負けないおもしろい町ができるぞというようなことは、基本的な認識として市民に概ね了解されていると思っております。

堀教授：

なるほど。僕が古いのかもしれないけれど、私が環境省で最初に仕事を始めた頃は、「環境保全とか自然保全とかというのは、理念はわかるけど現実には厳しいよ」というような話がありました。今や、市民のほうがより積極的で、環境保全や自然保全を行政がやらないと何やってんだという話になるようですが、この点、仁井さん、何かコメントはありますか。

仁井部長：

ちょっと個人的な経験かもしれませんが、廃棄物の行政の中でも容器包装リサイクルの立ち上げに携わりました。この中では、市民グループ、つまり、いろいろ批判的に受け止める人や、あるいは非常に協力的にサポートしてくださる人とのコミュニケーションが非



常に楽しくできました。

その後、産業廃棄物の行政に携わりました。こちらは率直に言って、市民の方々との関係が非常にタイトになっております。やはり、産業廃棄物は、そのネーミングだけで蛇蝎のごとく嫌われていて、民間の計画であろうと公的な計画であろうと、最終処分場の計画が持ち上げれば、地域住民の8～9割は圧倒的に反対にまわります。一方で、量の程度は別として、最終処分場というスペースは確保しなきゃいけない。また、法執行の側としては、一定の基準に合致しているものについては、皆様方が反対だということだけで不許可にすることはできません。「税金で生きている役人はこういうことも言わなきゃいけないんだろうなあ」と思いながら仕事をしておりました。

ですから、環境に対する意識は高い部分もあるんですが、やはり、結構きつい部分も飲み込んでいくことが社会全体として必要な部分があります。そこを、喜んでというところまでは難しいでしょうが、「社会全体はそうなんだろうな」というくらいには理解していただくコミュニケーションの力というのが私どもに必要なのだと思います。自治体のサイズが小さければそれなりに集約しやすいことはあるにしても、4,000人いれば4,000人なりの考え方があり、10万人いれば10万人なりの考え方があるので、このような中で多様性をある程度は維持しながら市民の意見の集約を図っていく技術がまさにリーダーに求められるものなんだと思います。

堀教授：

なるほど。さて、先ほど、下條村の伊藤村長の話聞いていて、人を使うのに非常に長けていると思ったのですが、人以外の地域の資源を持続的にうまく使うとか、俺ならこうするといったサジェスチョンを伊藤村長から頂けないかと思うんですけども、何かありませんか？。

高野助教授：

僕も同じ事を聞いたかったですけれども、たとえば、農業とか林業とかどうでしょうか？。

伊藤村長：

私どもの下條村は、特段の産業がないということでございます。農業・サービス業・工業を大体3分の1くらいの比率でやっておると思います。

農業は一時ものすごく衰退しました。従来は、当然市場ルートに乗せて大量生産・大量消費ということでJAならJAだけの流通経路に依存していたわけですがけれども、最近、人の交流がある程度盛んになってきたことから、安心安全、顔の見える直販体制をとっています。これが農家の皆さんになかなか魅力でございまして、だんだんいい答えが出ていると思います。

もうひとつは、くどいようでございますけれども、私どもは人材だけが資源でございます。本当に、もうどんなものを探し出すより、人材がピッと目覚めて、全員でがんばってくれれば私どもの地域では無限の資源になるということでございます。いくら井戸を掘っ

ても石油は出てきません。熱海ほどではないのですが、温泉は出ますけれども。やはり私も人材資源に頼って、そんな中から生き残っていかなければと思っております。

皆さん方は、「下條村の職員はムチでたたかれて、ビリビリやっとなる」と思われるかもしれませんが、決してそんなことはございません。みんな楽しくやっております。やる気のある人のやる気をなくすのが公務員の組織であり、その人の能力を最大限まで引き出すのが民間の組織といわれております、私は職員とよく相談して、各自各課の限界に近い目標をみんなで検討して設定します。そうして、その目標に真正面よりチャレンジして行って、その目標を達成した時の満足感・充実感なんていうのは、職員諸君が何ものにも変えがたい価値のあるものと頑張っております。

人間誰しも限りある人生です。どうせ一度しかないその人生、感激を感じ、結果として全体の奉仕者として公務員の使命を全うすることが大切であると信じています。

堀教授：

いやあ、すばらしい話です。ありがとうございました。

馬場市長：

農業の話をちょっとさせてください。私が1997(H9)年に日野市長に就任した後、農業基本条例という条例を作りました。

日野市は、昔から、用水がたくさんあって、東京で一番たくさん米を作っていたところなんです。農業でずっとやってきた町だったわけですね。それが、「農地はなくなってもいいんだ」というふうに思われていたことや、「農地は宅地予定地」という認識もあって、いつの間にか相続などで農地がどんどんなくなっていきました。

しかし、環境にうるさい住民から、農地守ろうよ、農業守ろうよ、という声が強くなって、それを踏まえて農業基本条例をつくりました。もちろん、農家が400軒くらいしかない都会なのに何で農業基本条例なんか作るのかという話もあり、また、はじめのうちは、農家の方のほうが及び腰だった感じがあったんですけども。

農業基本条例を作ったら、結構、農業が元気になりました。新潟県のように広いところで米を作ったり、酪農などすごい牧場を持っているのだけではなく、都会の片隅で野菜を作ったり、ブルーベリー作ったり、大根作ったり、人参作ったりするのも農業なんだと思います。農業があることによって、里山や水路などの良い環境も守れるということもあり、農業をもう一回見直してですね、わが地域の大きな財産である農地をこれ以上なくさないようにしたいと思っております。

農業の話が出ましたので、日野市の状況をお話させていただきました。

堀教授：

ありがとうございます。

水の郷を始めた当初の資源というのは、やはり、他にない貴重な資源というイメージが強かったのですが、その後、議論を深めていく中で、一見するとどこにでもあるような資源であっても、その資源の見方や捉え方、つまり、どういう風に資源を捉えるのかという

点が非常に重要だというように変わってゆきました。

その資源を生かすも殺すも人しだい。こうなると大変ですね。伊藤村長がずっとお話されているように、人間が仕事をするのだから人間を活性化して、意識改革すれば地域づくりはどうにでもなるんだとしますと、非常に元気が出ているのに資源が無いというようなことは無いわけで、もう一回自分のところにあるものを丁寧に見直していく作業が非常に重要なんだと、こういうことを改めて強く思いました。

活性化には2つの側面があって、ひとつは日野市さんが進めているような、住んでいる人たちが元気になったり、参加する場が増えるという形の活性化です。もう一つが、私が話したことですが、人を呼んでお金を落としてもらおうような活性化なのですが、これについていかがでしょうか。地域の活性化について、何か特別にこういう工夫をしたら良いのではというお話はありますでしょうか？。高野先生の先ほどの例の中には、よそから人を呼んでお金を落としてもらおうというような視点はありますか？。

高野助教授：

豊根村も、今まで観光客を呼び込むということをかなりやりました。そして、ある意味ではことごとく失敗しました。要は、名古屋からあまりにも遠いため、豊根村に着くまでに田舎がいくらでもあるので、田舎的な価値を売り込もうとしてもなかなか難しい。

今、豊根村の人たちが考えているのは、豊根村を好きになってくれる人とお付き合いをすることです。

私が学生を豊根村に連れて行く際に泊まる「大入の郷」という施設があります。ダムの水源地対策の補助金を使って村が建てた施設なんですけど、その管理・運営は、電気代などの負担を含めて、集落の人が全て行っています。そこでは、村の人たちが日常やっていることを体験できるプログラムを用意していて、この前は、スズメバチの巣を探して、その幼虫を食べる「はちぼい」をやりました。これは村の男たちのこの時期の大きな楽しみでして、初心者にはオオスズメバチは危険なので、クロスズメバチの小さな巣でやってくださるんですけども、これを集落の普通のおっちゃんが指導してくれるわけです。このようなことはどんな観光地に行っても体験できない。それに対して僕たちは受講料みたいな形でお金を払う。地味なんですけども、訪問した者も満足し、それを運営している側も小遣い稼ぎ程度にはなる。もう少し稼働率を上げて、儲けが出るようにして、何とか若い人を一人雇いたいと彼らは言っています。

このように、村の価値を単に見せるというだけじゃなくて、一緒に山を歩き、体験してもらおうという形での交流はいいやり方だと思います。

私が名古屋に帰ってから、「こんなに面白かったよ」と触れ回っていることもあり、「じゃあ、訪問してみよう」という者もいますし、各種の団体が環境教育のプログラムをする際に豊根の施設を使う事例も出てきています。

堀教授：

大事な点を幾つかお話頂きました。事例紹介の中で私も言いましたけれども、自然が豊かとか、大いなる田舎であるというところで止まってしまっただけでは駄目にして、それだけで

は全然売りにならない。日本全国にそのようなものは五万とあるのであって、そこだけのオリジナルなものではない。それだけではなかなか人は来ないので、それぞれの所で工夫しないと難しいということです。本日、会場にいらっしやっている皆さんのところではいろいろな工夫をされていると思いますが、豊根村のような体験というのも有力な方法と思います。もちろん、地域の資源はそれぞれ違っているので、それぞれ工夫をしないとけないということだと思えます。

さて、時間が迫ってきました。今日は、伊藤村長の人材・人づくりの話がインパクトがあり、また、高野さんから、今後の行政はファシリテーター・コーディネーターになっていかないと、不要となってしまう時代がくるという話がありました。そこで、人材と行政について馬場市長から少しお話を聞かせていただいて、また、仁井さんからは地域における行政の役割についてお話し伺いたいと思えます。

馬場市長：

私ども日野市の活性化においては、堀先生からお話があったように、住民と一緒にやっていくということについては、伝統的にこれまでやってきています。

ところが、よそからお客様をお呼びして、「おもてなし」をするという面での認識がほとんどありませんでした。多摩動物園や高幡不動などの面白いものが市内にあるにもかかわらず、しかも、お客様に来て頂いているにもかかわらず、そういう方々を町の活性化に結び付けようという発想がまったく無かったんですよね。このような反省から、大河ドラマ「新選組」などに絡めたイベントを実施しました。このイベントの後、たとえば市役所の職員の対応がずいぶん変わったという評価を頂くなど、職員が変わりました。もっともこのイベントに対しては、「行政は市内にいる人のために何かをやればいいのであって、よそから来るお客なんかどうでもいいじゃないか」「そういうものに市長の趣味で金を使うな」等の反発の声が一部の議員からあって、今でも尾をひいておりますが。

このようなことから、おもてなしをする態度を持つ職員を作るという意味では、「行政もこういう言う風にしなければいけない」というような研修を単に行うよりも、何らかのイベントを実施したほうが効果があるのではないかと考えています。このため、これからは、人をお呼びし、気持ちよくお迎えしてお帰り頂くという形の職員の教育もできれば良いと思っております。

堀教授：

では、仁井さんから。

仁井部長：

個々の地域活性化の行政とは離れたところで日々過ごしていますので、一般論になってしまうのですが。

今後の官民の役割分担の話にも掘ると思えますが、世の中の少々の揺れ動きとは関係無しにきちんと持続していくべき社会のインフラとしての行政の役割は確実にあると思えます。他方、地域の活性化のような官民の境界領域においては、触媒的な要素として官が先

鞭をつけるという部分があると思います。これは、単にお祭りをするというようなことではなくて、何らかのきっかけを作らなければいけない時に、行政がエンジンのセルモーターになるような意味です。もちろん、行政は実施する期間や範囲の制限を決めるとか、その身の丈というようなものを見極めながらやる必要があると思います。

堀教授：

はい。それでは高野さんと伊藤さんから、言い足りなかった点、あるいはこれだけ強調しておきたい点をお話頂きたいと思います。

高野教授：

人材育成のことなんですけれども、役所に人材を輩出しているのは大学でして、この大学の責任には犯罪的な面があったと思います。

うちの大学には公務員になりたいという学生が結構います。実際、うちの研究学科だと修士の1割ぐらいが公務員になっていきます。「なんで公務員になりたいの」と聞くと、「生活が安定しているから」というのが一番の理由。「社会全体のことが見える」「社会に貢献できる」というのが二番目の理由。とても行政の現場のことはまったく分かっていない。そういうことが分かるような教育をしてこなかったから、それは当たり前ではありますが。

それで僕はまずいと思って、セミナーを始めました。下條村へは行っていませんが、補完性の原則から見て先進的なところ—NPOが多いのですが—にコンタクトをつけて行ってこいと学生に言っています。たとえば、赤字のためにバス路線が無くなった後に、代替となるバスを運行しているNPO—住民の組織ですが—が四日市市にあります。そういう所に学生を行かせてやると、相手の方には大変ご迷惑なんですけれども、学生の目の色が変わるわけです。こういうことをやって初めて行政という分野に行く最初の心構えみたいなことができます。このように、大学は、公務員を目指す学生に対して、ちゃんと新しい公務員像を持ってもらえるようにトレーニングをして、送り出さなければいけないと思います。

他方、現職の役所の皆さんについて言えば、これから公務員は変わらなければいけないと言われても、そういう訓練も何もされてないですから出来なくて当たり前なんです。ですから、下條村の場合はホームセンターという再教育プログラムがあったわけなんですけれども、役所にも再教育プログラムのようなものがやっぱり必要だと思います。

そこで、もし可能であれば、地元の大学と行政が協力して、公務員を目指す学生と一緒に職員も学べるようなプログラムが出来たら良いと思っております。

堀教授：

では最後に、伊藤村長お願いいたします。

伊藤村長：

皆さん、激動の時代と言われて久しいわけですが、今は変革の時と言われています。過日、激動と変革の違いについて、ある評論家がテレビで話しておりました。「激動」

というのは、海にたとえると、嵐で海がものすごく荒れるんですけども、嵐が治まると、海には今までいたイワシやカツオがもとの状態に戻るようなことだそうです。「変革」というのは、非常にサラッと聞こえるようですが、これが曲者でございます、やはり嵐で海は荒れるそうでございます。しかし、これが治まった時に、それまでいたイワシがサメになったり、海中には何もいなくなったりするような形で、基本的に変わってしまうというのが今の変革の捉え方だそうです。だから恐ろしい、又、以前は、十年一昔と言われていました。今は時には二年一昔であると思うことがいくつも発生しています。最近下火になりましたけど「ホリエモン」。たった32歳の青年が、良い悪いは別にしてメディアの牙城であるフジテレビに札束をもって殴りこみをかける件、最近、楽天もやっています。こんなことがあるなんて、2年前に皆さんが予測したことは無いと思います。それだけ大きな変化があるわけでございます。十年一昔と二年一昔とでは、5倍のスピードになったということで、20キロの車を運転し景色を見ながら目的地に向かって進むのと、100キロで景色を見ながら目的地に着くくらいの違いがあるわけでございます、大変な時代になったと思っております。

しかしながら、大変だ、弱ったと言っているだけでは解決しません、批判は批判でいいし、理想は理想で高く掲げながら、私どもは、こうした時代の流れの中で現実を直視し、機敏な動作を習得していかなければいけないし、この不確実の時代、その尖兵となるのが地方公務員の皆さんであると思います。地方公務員の皆さんには、磨けばものすごく光る可能性があるわけでございます。今日までのご活躍に敬意を示しつつ更に最前線で一層頑張ってくださいことに期待しています。

堀教授：

二年一昔という話がありました。地域が大きく変わる時代でございます。その時にそれぞれの所でそれぞれの資源をどういう風に活かして地域を運営してくのか。大変難しいのではありませんけれど、非常に重要なテーマであると思います。

これは事務局へのお願いなるかと思えますけれど、水の郷サミットというのは、大変な時代に、地域が自分たちの資源をどうやって使っていくのかということを考える場なんです。そこが名水100選とは違うところです。ですから、みんなが知恵を持ち寄って情報交換したり、あるいは工夫を学ぶ場としてこのサミットをちゃんと活かしていただきたい。首長さんにももっと来てもらいたい。そのことを部長にもお願いして今日のパネルディスカッションを終えたいと思います。

パネラーの皆さん大変どうもありがとうございました。拍手をお願いしてお仕舞いにしたいと思います。ありがとうございました。